

総 説

わが国における統合失調症患者を対象とした 精神科作業療法に関する研究の動向

1997年～2006年の論文より

巽 絵理、銀山 章代
四條畷学園大学 リハビリテーション学部

キーワード

精神科作業療法, 統合失調症, 文献研究

要 旨

近年、わが国の精神医療保健福祉制度は激変し、統合失調症患者を取り巻く環境が大きく変化した。精神障害作業療法においても、病院での急性期における作業療法、長期入院患者の退院促進だけでなく、地域での生活支援が求められている。本研究は、統合失調症に対する作業療法の今後の動向についての示唆を得ることを目的として、それらに関する過去10年間の専門誌、関連雑誌の研究論文を取り上げ、分類・表示し概観した。その結果、論文数は増加傾向にあり研究手法は一事例研究が最多であった。作業療法は、病状安定や陰性症状改善、対人技能向上に焦点を当て実施していた。治療手段は、個々に応じた作業種目を選択し、回復状態によって適宜変更されていた。回復状態に関わらず、治療者との関係性確立が重要であり、適切な治療構造を考える必要がある。今後は実施した介入方法を明確に示し、効果の実証的データを積み重ねていく必要性が示唆された。

【はじめに】

1987年精神保健法により精神障害者の人権擁護と社会復帰促進が行われるようになった。さらに、1995年精神保健法の一部改正によって「福祉」の枠組みが精神保健と並んで法律の中に位置づけられた。それは統合失調症患者を「病院から社会復帰施設へ」「社会復帰施設から地域社会へ」という流れを作って行くことが期待されていた¹⁾。2002年には、病気の名称が「精神分裂病」から「統合失調症」に変更され、2004年9月の精神保健福祉の改革ビジョンでは、精神医療体系の再編として、精神科病床数の7万2千床の削減、病床の機能分化と地域医療体制の整備が打ち出された²⁾。2005年様々な議論を呼んだ医療観察法が施行開始された。さらに、2006年障害者自立支援法が施行され、精神障害も身体障害などと同様のサービスが利用できる仕組みとなった。

このように近年にかけて、精神医療保健福祉制度が激変する中、統合失調症患者を取り巻く環境は変化した。精神障害作業療法（以下OT）においても、病院での急

性期におけるOT、長期入院患者の退院促進だけでなく、地域での生活支援の実践が求められている³⁾。

そこで本稿では、統合失調症に対する精神科OTの今後の動向の示唆を得ることを目的として、それらに関する過去10年間の専門誌、関連雑誌の研究論文を取り上げ、分類・表示し概観した。実際にわが国の作業療法士が統合失調症患者にどのようなOTを実践し、どのような効果が得られたのか、OTの治療技法について整理し、今後の課題を探ってみた。

【方 法】

近年OTの研究の動向を探るにあたって、1997年～2006年の10年間の専門雑誌に発表された論文を調査対象とした。文献の抽出方法は、第1段階として、医学中央雑誌による論文検索を行い、1997年～2006年のキーワード「OT」および「統合失調症」に該当する原著および総説の論文を抽出した。第2段階として、第1段階によって抽出された全論文数180件から、次の基準を満

たすものを選択した。1) OTの効果を研究・報告しているもの 2) OTの目的が明らかなもの。その結果、53文献を今回の研究対象論文として選択した。

【統合失調症患者を対象とした精神科OT研究の概観】

論文数の推移を図1に示す。1997年から10年間の間に、専門誌に発表された統合失調症患者を対象とした精神科OTについての研究論文は、1997年は0件であったが、2001年を境に増加傾向にあり、2004年は10件あった。

医学中央雑誌に登録されている論文種類において、OTの治療法に関する総説はなかった。論文数においては、原著/症例報告が30件と最も多く、全体の56.7%を占めた。その症例報告の殆ど(28件、93.3%)が1例報告であった。原著のみの論文は16件あり、全体の30.1%を占める。そのうち、8件が症例数3名以下の事例研究の要素の強い論文であった。原著/比較研究論文は6件あり、全体の11.3%であった。そのうちランダム化比較試験は1件のみであった。論文の内容について、理論的基盤を検証する研究は、人間作業モデルを用いた論文が4件、森田療法モデルが1件、治療構造理論を用いた論文が7件、精神分析・対象関係論3件、行動分析論1件あった。その他モデルや理論を明示していない論文も多く、複数の理論的視点から考察されている論文もあった。

OTの効果を測定するために用いられている評価尺度

は、評価尺度を用いてないものが31件、薬物量に関する尺度が2件、精神症状に関する評価-簡易精神症状評価尺度(BPRS)、陽性・陰性症状評価尺度(PANSS)、機能の全体評価尺(GAF)、薬原性錐体外路症状評価尺度(DIEPSS)-8件、日常生活技能に関する評価-精神科リハビリテーション行動評価尺度(Rehab)、精神障害者社会生活評価尺度(LASMI)-3件、作業遂行に関する評価-作業遂行機能チェック表、作業時間、作業に関する自己評価-8件、心理面に関する評価-気分プロフィール検査(POMS)、知能検査(WAIS-R)、認知検査(MMS)、Quality of Life(以下QOL)の評価(WHO/QOL-26)-12件、身体面に関する評価(血圧・脈拍・心電図・ボディマス指数(BMI))-4件、その他(独自なもの)-3件であり、約6割の論文において客観的な評価尺度を用いたアウトカムを測定していない。それは、発表論文の多くは一事例研究であり、各々の実践を通して現象学的にOTの効果を捉えているためと推測できる。

特に統合失調症という疾患の特徴として、疾患の原因が未だ十分に解明されておらず、そして疾病と障害が共存し固定化されない⁴⁾。OTが臨床現場でつねに患者の「個」の問題と向き合い、その人の価値観に見合った作業活動の実現を目指すところにある⁵⁾ことから、事例報告や事例研究が殆どを占める理由として推察される。常に、臨機応変で柔軟な方向性が求められ、時にそれがリハビリテーションの中心的な課題となっている⁶⁾。

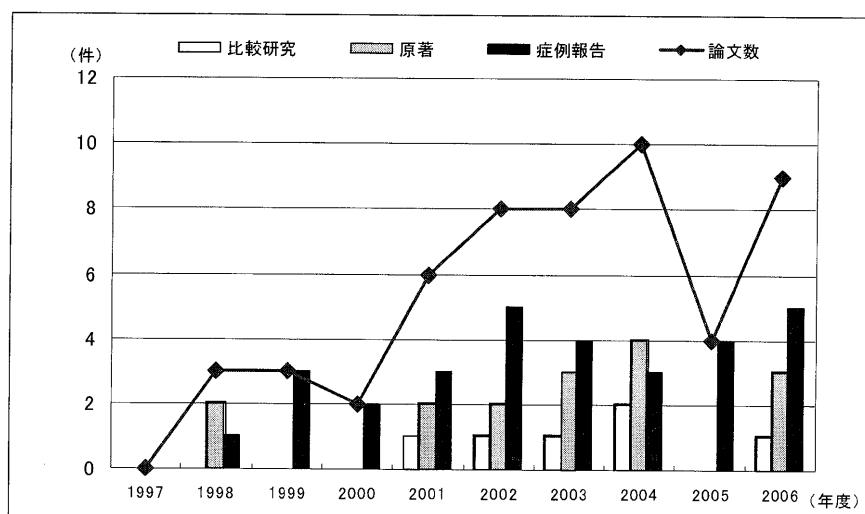


図1 統合失調症患者を対象とした作業療法実践関連論文の年次推移

医学中央雑誌に掲載されているキーワード「作業療法」および「統合失調症」の論文推移、論文種別は、医学中央雑誌の分類によるものである。

【統合失調症患者を対象とした精神科OTの効果】

1. OTの実施概要

統合失調症患者に対するOTの治療目的は、「病状安定」「陰性症状の改善」や「対人技能向上」が多く、「作業遂行能力向上」や「環境要因」に対する取り組みの報告は少なかった。今回、治療目的の不明確な論文は研究対象論文から除外したので、目的が記載されていない論文はなかったが、治療内容が具体的でないものもあり、作業療法士（以下OTR）がどのように考えどのように行動したのかが読み取れない事例報告もあった。

OTの実施期間は、2ヶ月～12年位まで、実施回数は週1回～毎日まで、実施時間も1日20分～2時間×2コマまでと様々であった。また、治療経過と共に実施回数を増やしている報告も多かった。治療形態は、マンツーマンの完全個別OTからパラレルな個人OT、20人ぐらいの集団までであった。対象者の治療経過に合わせて治療形態を選択しており、治療目的に合わせてそれぞれを組み合わせて実施している報告が多かった。その一方で、OTの実施時間や頻度や介入方法が不明確なものが散見され、明確に記載されている論文は全体の半数以下の21件であった。

「精神科OT」の実施時間や取扱人数の適正化を図るためにも、OTRが「どのような治療・援助が提供」でき、その結果「どのような成果が得られるのか」といった実証的なデータを臨床の場から提示して行くことが不可欠である⁷⁾。

2. 回復状態に応じたOTの治療目的と実施内容

回復状態に応じたOT^{8) 9)}に分けて概観すると、実践されている回復状態は急性期から長期入院やデイケアまでと幅が広く、OTの適応範囲の広さが伺えた。活動種目についても、手工芸から園芸・体操や外出支援までと多種多様で、ある種目に特化した報告もあれば、いろい

ろな種目を用いて実施した報告もあった。

1) 急性期 (表1)

急性期のOTの治療目的は、安心感と安全感の保障を第一に、混乱を避けること、身体感覚の回復と現実感を取り戻すことに主眼を置いて実施されていた。実施頻度は、週2～3回30分程度のストレッチや散歩など身体運動などもしくは、対象者自身はその作業種目の経験があり技能の高い「刺し子」を週3回90分程度のそれぞれ4～6ヶ月程度の期間実施されていた。実施時間も30分程度と短く、実施期間も半年程度で、ある一定の効果が得られている。治療環境については、刺激への過敏さや身体感覚の乱れ、不安、焦燥感に配慮していた。

刺し子を実施した対象者が「なにも考えなくていいし、気がまぎれる」と表現されていることや稲毛の報告の「CDを気兼ねなく自由に聴きたい」との記載からも、対象者が余分な気を使わずに済むような周辺環境の配慮が重要である。そして「作業への閉じこもり」¹⁰⁾を促しつつ、焦りや心の硬さを助長することのないよう、身体性を生かした活動が、早期OTにおける有効な技法論の一つとして考えられる。

2) 維持期—長期入院 (表2)

長期入院患者に対するOTの治療目的は、陰性症状の改善や生活空間の拡大、対人交流を促すといった、臥床傾向のある対象者へのアプローチや、社会復帰支援プログラム改革によって推進された退院に向けての環境調整や生活技能獲得であった。実施頻度は明記されていない論文が多く、その時間や回数は不明確であるが、見学や週1回から導入し徐々に回数を増やし、ほぼ毎日実施していると思われる報告が多い。実施期間は、1年以上実施されていた。陰性症状に主眼をおいた治療環境は、枠組みが緩やかで、患者のペースを守り不用意に侵襲しない、自閉を対処行動として受け入れる。また対象者自身がセラピストを観察できる場を設け、対象者自身が安心

表1 急性期の作業療法に関する論文

年号	タイトル	筆頭著者	雑誌名	治療目的
1998	精神分裂病の急性期からの回復過程での作業療法	鈴木光広	岩見沢市立総合病院医誌24巻1号 117-122	生活障害の改善
2000	開かれた自閉空間の治療的利用 分裂病患者の休息体験をめぐって	小林正義	OT19巻2号 101-111	沈静化・まとまりのある行動の発現・自律的休息が取れる
2003	私の作業療法実践 精神科臨床における理論的枠組みを考える—1症例から	稲毛義憲	OTジャーナル37巻7号 702-706	生活リズムの形成・身体感覚の取り戻し・意欲の向上
2003	急性期統合失調症に対する作業療法の効果	野口弘之	病院・地域精神医学46巻2号143-144	陽性症状の改善
2004	幻想と現実の分離・再統合における作業療法の機能 統合失調症性強迫障害・認知障害の事例より	山根 寛	OT23巻2号 125-132	幻想と現実の分離・再統合
2004	精神科急性期治療棟内における低構造化プログラムの試み	松下年子	日本看護学会論文集:精神看護35号30-32	適応技術の獲得促進

表2 維持期—長期入院の作業療法に関する論文

年号	タイトル	筆頭著者	雑誌名	治療目的
1999	重度欠損状態にある精神分裂病患者に対する作業療法による可変性について—ぬり絵を媒体とした相互交流	昆田雅子	精神療法25巻3号 249-257	安定した活動への参加 言語的交流の増加
2000	自閉的な患者に対する作業療法	高橋秀典	OT19巻1号 61-68	自閉的生活からの脱却・ 自主性を引き出す
2001	精神科臨床における「心理人形劇」の試み「垂れ流し」から「心の垣根の無い」ことの自覚へ	浦川 聡	OT20巻3号 232-240	自己表現と内省・役割獲得・ 対人関係の練習
2002	自転車エルゴメータを用いた運動プログラムの継続が残遺型精神分裂病患者の作業持続時間とBMIに及ぼす影響	武田秀和	体力科学51巻1号 101-107	減量と体力回復
2002	社会復帰支援プログラムの改革が社会的入院の克服に結びついた症例	塩原直美	茨城県立病院医学雑誌20巻1号65-68	退院生活に向けての意欲の 向上・対人関係改善
2002	作業的存在としての対象者を援助することの意味—慢性期精神分裂病の一症例を通じて	一原里江	OT21巻5号 463-471	生活の再構築
2002	長期入院精神分裂病患者に対する集団生産作業の治療的利用	四本かやの	神戸大学医学部保健学科紀要18巻181-189	対人関係の発展・生活課題の 達成
2003	手を振り人を選り続けてきたAさん—個別の関わりから長期入院者への支援を考える	鏡 寛	病院・地域精神医学46巻2号170-172	陰性症状の軽減
2003	知的障害をもつ統合失調症の長期入院女性患者に対する作業療法の一試み	塩原直美	茨城県立医療大学紀要8巻139-143	衝動性の改善
2004	長期入院を経て精神科療養病棟から退院した2症例—小規模作業所への通所と家族の協力が可能となるまでの条件の検討	山下陽三	病院・地域精神医学47巻1号80-82	環境調整
2005	長期入院者が地域での生活を可能にする支援の試み—実際の生活場面における問題解決の訓練と支援ネットワーク構築のあり方	吉田尚美	病院・地域精神医学48巻1号28-29	退院・生活スキルの向上
2006	積極的な作業療法は閉鎖病棟の慢性統合失調症患者の症状や薬物にどう影響するか?	鶴田 聡	精神科治療学21巻5号	精神症状の軽減
2006	陰性症状の強い長期入院統合失調症患者に対する関わり	鎌田由布子	青森県OT研究15巻1号 57-60	陰性症状の軽減
2006	閉じこもりを保障する作業療法—8年間同一病室に臥床し続けていたA氏への関わりから	巽 絵理	精神障害とリハビリ10巻2号 155-160	陰性症状の軽減・生活空間の 拡大
2006	隔離室から病棟生活へ—生活空間拡大へのアプローチ	中村紗織	日本精神科看護学会誌49巻1号 104-105	精神症状の安定・生活空間の 拡大・病棟生活の適応

できるまで待つ配慮をしていた。治療形態は、集団を利用している場合と個人を利用している場合とあった。

基本的にOTRとの二者関係を確立させるために、適切な構造を考えて実施することが重要であるといえる。そして、導入時には過剰な対人刺激をさけることや、プログラムを展開させるときには作業活動の要素を大きく変更しないなどの配慮が必要¹¹⁾¹²⁾である。活動選択の際には、その人の生活史から探求しその人にとっての価値のある作業、即ち一原¹³⁾の言う「自己の内部で意味を見出す活動」の選択が重要である。

長期入院患者の退院に向けた援助は、生活技能向上のために実際の生活場面での支援を実施しており、具体的な問題解決技能の獲得に向けて、訪問看護やヘルパーおよび家族などと他職種間で連携し実施していた。

長期入院患者の退院促進は、社会復帰施設の増設によるところも大きいだが、本人の意志やモチベーションが高まらなければ退院には繋がらない¹⁴⁾。菅原¹⁵⁾が主張しているように、「病院であるから退院するのが当たり前」というスローガンが先行し、患者本人の意思を無視してしまう危険性も否定し得ない¹⁶⁾。一人ひとりの生活背景や余暇などにも注目し、プログラムを立てていくことが重要であり、自信をつけ活動性が向上するには時間かか

る。入院中から信頼関係を確立した者が、退院後も安定するまでは支援者のキーパーソンとなること¹⁷⁾が、安心した生活を送る上で重要である。

3) 維持期—社会内維持(外来・デイケア)(表3)

外来患者を対象としたOTの治療目的は、ADL技能向上や対人技能向上だけでなく、認知機能改善や、対象者の主観的QOLの変化など多種多様であった。実施頻度も1回の介入の効果判定を行っているものから3年以上の経過を追っているものもあった。入院患者を対象にした論文と大きく異なる点は、評価尺度を用いてその効果判定を実施している研究論文が多かった。

デイケアに通うことによる主観的QOLの変化に関して¹⁸⁾は、個々によって有意差に差が有り、皆が有意に向上するとはいえなかった。また面接における返答内容と、主観的QOL-26の評価結果の縦断的な変化と必ずしも対応していなかった。認知リハビリテーションの取り組み¹⁹⁾でも認知機能の有意な改善はなく、統合失調症治療の難しさが伺えた。山根²⁰⁾や腰原²¹⁾の事例研究からは、デイケアや外来においても、対象者のペースを尊重し安心して過ごせるように心がけたといった基本的な配慮が重要と述べられていた。その配慮によって、スタッフに対する信頼感が生まれ、服薬指導の受け入れやデイケア

表3 維持期—社会内維持（外来・デイケア）での作業療法に関する論文

年号	タイトル	筆頭著者	雑誌名	治療目的
2001	作業療法における依存と分離について 見捨てられ不安を抱く症例との関わりから	腰原菊恵	OT20巻3号 224-23	依存から自律への促し
2002	デイケア通所が日課となっている慢性期の統合失調症患者における主観的なQOL評価	磯石栄一郎	北海道OT19巻2号 111-115	生活を支える・QOLの向上
2004	幻想と現実の分離・再統合における作業療法の機能 統合失調症性強迫障害・認知障害の事例より	山根 寛	OT23巻2号 125-132	幻想と現実の分離・再統合
2004	精神疾患患者における園芸を用いた作業療法の心理的効用	館内由枝	医療58巻4号211-215	感情の変化・心理的効果
2004	フローチャートを用いた精神障害者の課題遂行分析	加藤拓彦	OT23巻3号 206-213	(課題遂行技能の評価)
2004	統合失調症患者に対する認知リハビリテーションの試み	堀家 潤	回生病院医学雑誌11巻1号37-40	前頭葉機能改善
2004	デイケア訪問を通して症状が改善した慢性期統合失調症の一症例	榎木浩行	北海道OT21巻1号 7-14	ADLでの不安軽減・症状安定
2004	外来作業療法におけるパラレルな場の利用 青年期症例との関わりを振り返って	佐保真里	北海道OT20巻2号 90-95	対人関係の改善・症状安定

という居場所の提供, 対人交流など基本的な生活を支えることを可能にする。そして, 対象者の抱える具体的な問題を地域の中で援助し, 対象者が主体的に解決できる能力を高め, 安定した生活が送れるようになるための治療的役割をデイケアは担っていると推察される。

4) その他の時期 (表4)

急性期や長期入院と明記されていない入院患者に対するOTの目的は, 陰性症状の軽減や衝動性の改善, 認知機能改善などの機能的障害に対するアプローチと, 対人交流技能の向上に大きく二分化されており, 退院に向けた人的環境整備や就労に関する支援は1件ずつであった。

この時期においては, 患者とOTRがともに話し合う協業が大切で, そのことによって両者の相互理解と信頼を深めることができる²²⁾。その治療者—患者の関係性構築によって, 患者の受信機能を高め, Social Skills Training (SST) における練習課題の取り組みにも変化を及ぼしている²³⁾。共に同じ作業と時間を共有することで, 同志という感覚も得られやすいと思われる。協業を促進し, 今後の方向性を示しやすいツールとして, コミュニケーションと交流技能評価 (ACIS) があり, これらを用いることによって, アウトカム測定にも有用である²⁴⁾と言える。

特に, 1) ワープロ作業は認知・実行機能という知的活動の経験による充足感が得られる²⁵⁾。2) 化粧などの本来持っている潜在的な願望を満たすような作業活動には導入しやすい²⁶⁾。3) 運動療法については動機付けの維持が困難であり, BMIの減少は運動療法そのものが影響せず, 食事療法が有用である²⁷⁾。4) 嚥下リハは, 精

神障害があっても摂食・嚥下困難を改善できる²⁸⁾。といった報告があった。

つまり患者の意思を反映させた目標を設定し, 患者にとってもプログラム内容やその結果 (効果) が明確なものは, 治療に対する動機付けを引き出し, 日常生活への意欲向上に繋がる。そして本人にとって意味ある活動をすることで, 充実感・達成感が得られ, 陰性症状の改善に繋がるといえる。また人と関わる必要のある協同作業が, 期待される役割行動を認識する能力不足を補う²⁹⁾ ことによって, 対人交流技能向上に寄与する。

3. 比較研究で立証された効果 (表5)

実験的研究が最も価値が高いとみなされていた時代から, 個人の変化に焦点を当てたシングル実験法のような新しい研究手法が導入されたりしているが, 量的研究も質的研究も共に充実させていくのがあるべき姿³⁰⁾ と言われている。そこで, 精神科領域の中では数少ない比較研究論文について概観する。

OTの効果について各々の調査から, 慢性統合失調症患者が, 1年間積極的にOTに参加しても症状の変化 (BPRS・GAF) は有意に変化しないが, 抗精神病薬量は有意に減少した。しかし, 急性期の統合失調症患者に3ヶ月未満の身体運動的なOTを実施したところ, BPRSは有意に改善する傾向が見られた。それらのことから, 陽性症状に対するOTは, 有用である傾向が見られるが, 陰性症状については効果が明らかにされなかった。しかし, 主観的な幸福感 (Visuale Analogue Scale of Happiness) については, 作業参加群の方が, 不参加群より主観的幸福感が有意に向上し, 作業参加群の方が作

表4 その他の時期の作業療法に関する論文

年号	タイトル	筆頭著者	雑誌名	治療目的
1998	1日における作業療法の回数が精神分裂病者に与える効果 3年間にわたるバウムテストによる補助的評価を試みて	稲富宏之	OT17巻2号 133-142	OTに対する動機付け・環境調整能力・自我調整能力の獲得への成長
1998	分裂病者に対する個人的作業療法を基点としたリハビリテーション	大田卓生	精神科治療学13巻5号 619-626	人間的成長・生命力の発展性・人間的充足感
1999	対象関係の変化と二面性への配慮 導入期に病室を訪問した症例	腰原菊恵	OT18巻2号 111-117	活動性の向上・人との交流促進・生活の場の拡大
1999	当院の作業療法における作業活動について 症例Sに用いた作業活動とその経過を通して	菅家靖子	神奈川県立精神医療センター研究紀要10号 59-66	規則正しい生活・対人関係・作業能力
2001	作業療法は精神分裂病の喜びとを幸せにするか(その2) 作業を行っている時と行っていない時との主観的幸福感	鈴木喜八郎	弘前大学医技術短大紀要25号 147-154	幸福感の増大
2001	「作業への閉じこもり」の治療的利用 分裂病回復初期の治療構造について	小林正義	OT20巻5号 472-482	不安感や負担感の軽減・自己感の回復
2001	生産作業と創作作業による精神分裂病患者の行動の違い	四本かやの	神戸大学医学部保健学科紀要17巻 9-1	(行動特性分析)
2002	精神分裂病の作業療法受療経過	山口芳文	OT21巻4号 309-319	(転帰調査)
2002	人間作業モデル・習慣化サブシステムの評価と治療的アプローチの検討 役割意識を殆ど持たずに行動する分裂病患者の例	加瀬 忍	大阪府立中宮病院紀要12巻 15-16	社会性の向上
2002	協業による作業療法への参加が意志的作業選択に変化をもたらした統合失調症患者の検討 「作業に関する自己評価」を手がかりとして	鈴木新吾	作業行動研究6巻2号79-85	人的環境調整・対人関係能力や問題解決技能の向上
2003	慢性統合失調症患者に対する"化粧"の効果 意志の側面から	黒瀬亜由美	OT22巻1号 62-68	陰性症状の軽減・意志の改善
2003	無為自閉的に過ごし治療導入が困難な慢性統合失調症患者に対する作業療法の試み 治療構造の観点から	眞柄正隆	OT22巻2号 149-150	陰性症状の軽減
2003	罪を犯したAさんの作業療法経過を振り返って	酒井道代	病院・地域精神医学46巻2号153-155	現実と向き合う・将来に向かう心の準備性を高める
2003	精神科作業療法における「コミュニケーションと交流技能評価(ACIS, Assessment of Communication and Interaction Skills)」の有用性	京極 真	作業行動研究7巻2号 104-113	対人交流技能改善
2004	統合失調症者の肥満に対するグループセッションについての検討	磯石栄一郎	岩見沢市立総合病院医誌30巻1号59-64	BMI改善
2004	園芸療法が精神疾患患者に与える心理的及び生理的効果の検討	堀江昌美	精神科治療学19巻5号 643-649	心理的・生理的プラスの効果
2005	Social Skills Trainingと作業療法の相補的利用 目標選定が困難な症例を通して	眞柄正隆	OT24巻1号 71-79	対人技能向上・陰性症状改善・ADL技能向上
2005	知的機能を必要とする作業が情動の変化に与える影響 ワープロ作業への取り組みに伴い暴力行為が減少した1症例の検討から	竹田里江	OT24巻6号 601-610	情動機能の調節
2005	内面を文章化することを通してアイデンティティが確立された1症例	畑田早苗	土佐リハジャーナル4号 9-13	アイデンティティ確立・対人交流技能向上
2006	理解・判断力低下の症状がみられる統合失調症患者に対する作業療法	三橋武信	青森県OT研究15巻1号 21-25	認知機能改善・感情の発散・気分転換・社会性の向上
2006	統合失調症の陰性症状に対する治療戦略 ペロスピロンと作業療法の相補的効果	堂面有加	新薬と臨床55巻10号 1608-1613	陰性症状の軽減
2006	摂食・嚥下障害がある統合失調症の患者へのチームアプローチ 摂食・嚥下リハビリテーションの取り組み	菊地純子	日本看護学会論文集:精神看護37回 69-71	摂食嚥下機能改善・身体状態改善
2006	好みを取り入れた作業の導入について	山田千寿子	青森県OT研究15巻2号 37-39	病状安定・臥床時間の減少
2006	集団歌唱活動において言語表出が得られた統合失調症の1症例	浅野雅子	北海道OT23巻2号 116-120	自己表出の促進や活動性の向上・対人交流向上

業遂行能力は高いが、作業遂行能力の程度と主観的幸福感は無関係であるという結果が得られている。また鈴木³¹⁾は、OTは、作業遂行能力のみならず生活技能および生活技能の水準を左右する陰性症状に影響をもたらしているとも述べている。

つまり、OTが陰性症状に効果がないと判断するのはなく、BPRSの評価の特徴として、陽性症状の変化に敏感に測定できることと、陰性症状の変化には時間がかかるといった特性が、有意な変化が得られなかった理由として推察される。

園芸の効果について、心理的および生理的効果が検討されている。統合失調症患者15人に対して園芸療法を

1回実施した際のPOMSによる感情状態の変化は、園芸療法の前後で殆ど差異を認めなかった。月に3回、3ヶ月間園芸療法を実施した研究においては、一般感情尺度での気分の状態は実施前後において肯定的感情の変化は10%水準で有意な傾向が見られ、否定的感情も有意に減少した。特に、「のんき」で「ゆっくり」とした感情を強く感じていた。生理学的指標としての、血圧と脈拍測定では有意な変化はなく、心拍測定とデータの累積をするアクティブトレーサーAC-301(GMS製)で測定したもので、交感神経の働きが低下し、副交感神経の働きが増加するといった生理学的効果が認められた。

そのことから、園芸療法は1回のみの実施では効果が

表5 比較研究論文

年号	タイトル	著者	雑誌名	対象者	評価尺度	結果	活動
2001	作業療法は精神分裂病の人の とを幸せにするか(その1) 作業参加群と作業不参加群の 主観的幸福度の比較	鈴木 喜八郎	弘前大学医療 技術短期大学 部紀要25号 137-145	参加群S44名/ 不参加群S44 名	主観的幸福度 スケール 作業遂行 チェック表	作業参加群の方が主観的幸福感は有意 に高い 作業能力と主観的幸福感は無関係 作業療法は主観的幸福感を高めている	通常 OT
2002	精神分裂病の作業療法受療経 過	山口 芳文	作業療法21巻 4号 309-319	S136例	なし	統合失調症患者の8割以上はOTを中止せず 継続している。処方された1/3はOTを活用し つつ社会参加への段階を歩む	通常 OT
2003	急性期統合失調症に対する作 業療法の効果	野口 弘之	病院・地域精 神医学46巻2 号143-144	早期OT15例/ 導入なし33例	BPRS 井の頭方式OT 評価	BPRSにおいて陽性症状が改善する傾向 陰性症状は改善を促進する効果が得ら れない	身体 運動
2004	精神疾患患者における園芸を 用いた作業療法の心理的効用	館内 由枝	医療58巻4号 211-215	健常者53名/ S25名,うつ18名, AL6名, BPD2名, PTSD1名, 強迫1名	POMS 血圧, 脈拍	精神疾患患者はネガティブな感情を表 す。S変化なし。 その他の疾患はネガティブな感情の低 下と活気の上昇	園芸 療法
2004	園芸療法が精神疾患患者に与 える心理的及び生理的効果の 検討	堀江 昌美	精神科治療学 19巻5号 643 -649	13名(S5名,うつ 3名・睡眠障害 2名・摂食障害 2名・強迫1名)	GAF 一般感情尺度 デジタルホル ター心電計	園芸療法への参加により否定的感情の 減少し, 肯定的感情が増加する・交感 神経の働きが低下し副交感神経系の働 きが増加する	園芸 療法
2006	積極的な作業療法は閉鎖病棟 の慢性統合失調症患者の症状 や薬物にどう影響するか?	鶴田 聡	精神科治療学 21巻5号 (2006.05)	S66例	GAF BPRS 抗精神病薬	積極的なOTへの参加群のみ抗精神病薬 量の有意な低下, しかしGAF/BPRSは 変化なし	積極 的な OT

得られにくいですが、複数回実施することによって、否定的感情を軽減させ肯定的感情をもたらす、安静状態へと導く効果を併せ持つ。また他の療法に比べて参加率が高く、園芸が身近に親しめるといった特徴³²⁾もあることから、統合失調症患者の緊張を緩和させ、活気をもたらす作業として有用である。

【まとめ】

わが国の統合失調症患者を対象とした精神科OTの治療効果を明らかにするために、過去10年間のOT実践研究53文献を分析した。

OTの治療目的は、「病状安定」「陰性症状の改善」や「対人技能向上」に焦点を当てて実施していた。治療手段は、個々に応じた作業種目を選択し、その状態に応じて適宜変更されていた。ただ、個々に応じた対応を長期間にわたって実施しているために、介入方法が不明確な論文も多かった。

今後、OTのエビデンスを確立させるためには、対象者の回復状態に応じた個別援助、集団を有効に活用した治療・援助や退院促進支援などを実践すること。その自らが実施した介入方法を明確に示し、効果の実証的データを積み重ねる必要がある。またデータを示す際には、構成的な評価と現象を重視する評価の併用が重要である。

【引用文献】

- 1) 谷中輝雄：精神分裂病患者のためのリハビリテーションサービス—制度と施設をめぐる動向と概観—, 作業療法ジャーナル30: 4-7, 1996.
- 2) 安西信雄, 瀬戸屋雄太郎：精神保健福祉の動向と社会的入院患者の退院問題, 作業療法ジャーナル38(12): 1090-1096, 2004.
- 3) 香田真希子, 相澤みなこ：ACT-Jにおける地域生活支援の実践から—従来のサービスとの相違点, 作業療法ジャーナル39(10): 999-1003, 2005.
- 4) 笠原嘉, 風祭元, 武正健一：必修精神医学改定第2版. 南江堂, 東京, 1991, pp99-117
- 5) 鎌倉矩子, 宮前珠子, 清水一：作業療法士のための研究法入門. 三輪書店, 東京, 1997, pp13
- 6) 稲毛義憲：私の作業療法実践—精神科臨床における理論的枠組みを考える—1症例から, 作業療法ジャーナル37(7): 702-706, 2003.
- 7) 倉富真：平成18年度診療報酬改定の影響と今後の対応—精神科作業療法に関連する調査報告より—, 作業療法26巻2号: 110-117, 2007.
- 8) 杉原素子, 井上英治, 大丸幸, 他：精神科作業療法の今後のあり方に関する研究. 平成9年度厚生科学研究「精神医療に関わるコメディカルのあり方に関する研究」報告書: 177-244, 1999.
- 9) 山根寛, 他：精神科作業療法の今後の方向性に関する研究—1998年度報告. 平成10年度厚生科学研究

- 「精神医療に関わるコメディカルのあり方に関する研究」分担研究報告書, 1999.
- 10) 小林正義, 富岡詔子: 「作業への閉じこもり」の治療的利用—分裂病回復期初期の治療構造について—, 作業療法20巻5号: 472-882, 2001.
 - 11) 巽絵理: 閉じこもりを保障する作業療法—8年間同一病室に臥床し続けていたA氏への関わりから—, 精リハ誌10(2): 155-160, 2006
 - 12) 鏡寛, 稲毛義憲: 手を振り人を避け続けていたAさん—個別の関わりから長期在院者への支援を考える—, 病院・地域精神医学46巻2号: 170-172, 2003.
 - 13) 一原里江, 小川小枝子, 青山宏, 他: 作業的存在としての対象者を援助することの意味—慢性期精神分裂病の一症例を通じて—, 作業療法21: 463-471, 2002.
 - 14) 岡田千砂: 長期在院者の退院促進に携わる作業療法, バンド演奏を通じてのかかわり, 作業療法ジャーナル39(10): 983-986, 2005.
 - 15) 菅原昭一: 長期入院者を支える作業療法の役割, 作業療法事例集(日本作業療法士協会学術部編)日本作業療法士協会, 1998, pp242-247
 - 16) 塩原直美: 社会復帰支援プログラム改革が社会的入院の克服に結びついた症例, 茨城県病医誌20巻: 65-67, 2002.
 - 17) 吉田尚美, 竹内亜希子, 大野美恵子, 他: 長期入院者が地域での生活を可能にする支援の試み, 病院・地域精神医学48巻1号: 28-29, 2005.
 - 18) 磯石栄一郎, 三品斉, 杉本久子, 他: デイケア通所が日課となっている慢性期の統合失調症患者における主観的なQOL評価, 北海道作業療法19巻2号: 111-115, 2002.
 - 19) 堀家潤, 山内裕絵, 小笠原一能, 他: 統合失調症患者に対する認知リハビリテーションの試み, 回生病院医学雑誌11巻1号: 37-40, 2004.
 - 20) 腰原菊恵, 山根寛: 作業療法における依存と分離について—見捨てられ不安を抱く症例との関わりから—, 作業療法20巻3号: 224-231, 2001.
 - 21) 山根寛, 腰原菊恵: 幻想と現実の分離・再統合における作業療法の機能—統合失調症性強迫障害・認知障害の事例より—, 作業療法23巻2号: 125-132, 2004.
 - 22) 鈴木新吾, 山田孝, 石井良和, 他: 協業による作業療法への参加が意志的作業選択に変化をもたらした精神分裂病(統合失調症)患者の検討「作業に関する自己評価」を手がかりとして, 作業行動研究6巻2号: 79-85, 2002.
 - 23) 眞柄正隆: Social Skills Trainingと作業療法の相補的利用 目標選定が困難な症例を通して, 作業療法24巻1号: 71-79, 2003.
 - 24) 京極 真, 野藤弘幸, 山田孝: 精神科作業療法における「コミュニケーションと交流技能評価(ACIS, Assessment of Communication and Interaction Skills)」の有用性, 作業行動研究7巻2号: 104-113, 2003.
 - 25) 竹田里江, 青山宏: 知的機能を必要とする作業が情動の変化に与える影響 ワープロ作業への取り組みに伴い暴力行為が減少した1症例の検討から, 作業療法24巻6号: 601-610, 2005.
 - 26) 黒瀬亜由美, 倉田健一, 西川正: 慢性統合失調症患者に対する“化粧”の効果 意志の側面から, 作業療法22巻1号: 62-68, 2003
 - 27) 磯石栄一郎, 山口則子, 赤澤知香, 他: 統合失調症者の肥満に対するグループセッションについての検討, 岩見沢市立総合病院医誌30巻1号: 59-64, 2004.
 - 28) 菊地純子: 摂食・嚥下障害がある統合失調症の患者へのチームアプローチ 摂食・嚥下リハビリテーションの取り組み, 日本看護学会論文集, 精神看護37回: 69-71, 2006.
 - 29) 加瀬忍: 人間作業モデル・習慣化サブシステムの評価と治療的アプローチの検討 役割意識を殆ど持たずに行動する分裂病患者の例, 大阪府立中宮病院紀要12巻: 15-16, 2002.
 - 30) 鎌倉矩子, 宮前珠子, 清水一: 作業療法士のための研究法入門. 三輪書店, 東京, 1997, pp10-pp19
 - 31) 鈴木喜八郎, 渡辺俊三, 小山内隆生など: 会報病棟に入院中の慢性分裂病の人々の生活 技能, 広島大学医療技術短期大学部紀要, 23: 127, 1997.
 - 32) 野上珠代, 高田小百合, 重松いづみほか: 施設で行うアクティビティの実際—園芸療法による心のリハビリテーション—. 臨床老年看護, 7: 42-47, 2000.

Trend of studies of psychiatric occupational therapy in schizophrenic patients in Japan

| Based on articles published from 1997 to 2006 |

Eri Tatsumi, Akiyo Kanayama
Shijinawate Gakuen University Faculty of Rehabilitation

Key words

psychiatric occupational therapy, Schizophrenia, trend of studies

Abstract

The welfare system for mental health in Japan has recently and rapidly been changed and the situations of schizophrenic patients have also dramatically been changed. Community support for people with mental disorders is required as well as occupational therapy during acute hospitalization and promoted discharge of long-term inpatients. The aim of this study was to investigate the future trend of occupational therapy for schizophrenic patients. Studies that were published in academic journals and related ones for the past ten years (from 1997 to 2006) were reviewed and classified. Most of studies were case reports and the number of articles has been increased. Occupational therapy was given for stable disease condition, improvement in negative symptom and interpersonal communication skills. In therapy, different occupations were selected individually and replaced as required according to improved conditions. It is the most important to establish the relationship with a therapist and appropriate therapy system is required in all convalescent patients. Further studies are needed to accumulate evidential data on effects of occupational therapy with clear classification of invasions.